

顔を見つめた。その表情があまりにも切なげで、私は何も言えなくなった。だって私だって本当は待ちたくなんてない。あなたに触れられたい。十年分の空白を埋めるように、あなたのすべてを感じたい。そう思っている自分がいて、その欲求は雨に濡れたシャツの奥で疼いていた。

第二章 空白を埋めるように

あなたは私の返事を待たずに、私の身体を抱き上げた。突然の浮遊感に私は小さく悲鳴を上げて、あなたの首にしがみついた。あなたは私を抱えたまま部屋の奥へと歩いていく。寝室のドアを開けて、ベッドの上に私を下ろすと、あなたは私の上に覆いかぶさってきた。二人分の重みでベッドが軋んで、その音が妙に官能的で、私は身体の奥がきゅっと疼くのを感じた。あなたは私の髪をかき上げて、額に唇を落とした。それから目尻鼻先、頬、そして唇へと順番にキスを降らせていく。そのひとつひとつが丁寧で、まるで十年分の想いを確かめるかのようにゆっくりと私の顔中に口づけていった。私は目を閉じたまま、あなたの唇の感触に身を委ねた。あなたの手が私の服の裾から中に入ってきて、素肌に触れる。その手のひらは硬くて節くれ立っていて、男の人の手なんだと当たり前のことを改めて実感して、私は胸の奥が熱くなった。あなたは私の服をゆっくりと脱がせていった。キャミソールの肩紐をずらして、露わになった鎖

骨に唇を這わせる。ちゅ、ちゅ、と音を立てて吸い付かれるとそこに赤い痕が残るのが自分でもわかった。あなたは私の肌に自分の痕を刻むように、首筋から胸元にかけて何度もキスを落としていく。私はその感覚に耐えられなくて、あなたの髪に指を絡めてぎゅっと握った。あなたは顔を上げて、私の目を見た。その瞳は熱に浮かされたように潤んでいて、でもどこか不安そうで、私はあなたの頬に手を伸ばしてそっと撫でた。あなたは私の手に自分の手を重ねて、指を絡めてきた。その仕草が甘やかで、私はあなたのことを愛おしいと思った。幼なじみのくせに、こんなふうに私を求めないで。そう思うのに、身体は正直で、あなたの指が私の胸の膨らみを包み込むと、私は声を上げそうになった。あなたは下着の上からゆっくりと胸を揉みしだいて、時々指先で頂きを摘まみ上げる。その刺激が鋭くて、私は腰を浮かせて逃げようとした。でもあなたは私の腰を押さえつけて、逃がしてくれなかった。あなたは私の耳元で「ここ、感じる？」と低く囁いた。その声が脳髄に直接響いて、私は首を横に振ることしかできなかった。あなたは下着をずらして、露わになった胸の先端に唇を寄せた。熱い舌がそこを這い回り、強く吸い上げられる。ちゅぷちゅぷという水音が部屋に響いて、私は羞恥と快感の狭間で頭がおかしくなりそうだった。あなたの舌が右の胸を転がすたびに、左の胸も同じように疼いて私はもどかしさに太腿をすり合わせた。あなたはそれに気づいて、空いた方の手で左の胸を揉み始めた。両方同時に責められて、私は耐えきれずに「あっ」と声

を漏らした。その声を聞いたあなたは、顔を上げて満足そうに笑った。その笑い方が昔と変わらなくて、でも目つきは雄のそれで私は身体の芯が甘く溶けていくのを感じた。

あなたの手が私の太腿を撫でてゆつくりと内側へと滑り込んでくる。私は反射的に脚を閉じようとしたけれど、あなたはそれを許さなかった。脚を開かせて、下着の上から割れ目をなぞるように指を動かした。下着越しでもわかるくらいそこは濡れていて、あなたの指が布地を押し込むたびにぐちゅりと音がした。私は恥ずかしさで顔が熱くなって、あなたの胸に手を突っ張って抵抗しようとした。でもあなたは私の手を掴んで、シーツの上に縫い付けた。あなたの力に敵わないことを知って、私は観念して身体の力を抜いた。あなたは下着を脱がせて、私の中心を露わにした。そこはもうぐっしょりと濡れていて、恥ずかしいほどだった。あなたは私の脚を大きく開かせて、その中心に顔を近づけた。熱い吐息が敏感な場所にかかって、私はひくんと腰を跳ねさせた。あなたは「綺麗だ」と呟いて、それから遠慮なく舌を這わせた。ぬるりとした舌が割れ目を上下に舐め上げて、敏感な突起を吸い上げる。その刺激が強すぎて、私は悲鳴のような声を上げた。あなたの舌は容赦なく私の弱いところを攻め立てて、私は腰を逃がそうとするのに、あなたの腕ががっちり私の太腿を固定していて動けない。あなたは私の反応を楽しむかのように、時々顔を離しては熱い息を吹きかけてまた舌を這わせた。